

ユマニチュードは、奥深い哲学に根ざしていた。テクニックではなく。

美馬達夫・脳外科医

ユマニチュードはよく知っているつもりでした。

しかし、それはイヴ・ジネストさんが見つけた便利なテクニック（技術）についてでした。そのようなことは、長年介護に関わってきた中での「秀でた人たち」が、日本でも同様の技術に気づいていたのではないかと、少し軽んじていました。

今回の講義の直前に、ユマニチュードに強い関心を抱いた理由は以下の2つです。

①カンヌ国際映画祭のPalme d'or受賞作品「急に具合が悪くなる (Soudain)」にはユマニチュードが深く関わっていたこと

②ユマニチュードの基本に「見る・話す・触れる」があることは知っていましたが、第4の柱「立つ」の深い意味に驚きました。他の3つと質が違います。

講義当日に映画を見るには3時間半かかるので諦めて、電子書籍で「ユマニチュードという革命」を読み始めました。この本は本当に素晴らしかったです。

イヴさんの生い立ちに始まり、体育学の講師としてロゼットさんと共に看護師の腰痛対策技術の開発を始め、現場の老人介護施設での悲惨な状況（※1）に直面し、ベッド上の清拭から立って洗うことへの変更に始まり、時間をかけ試行錯誤しながら介護を改善させるユマニチュードを作り上げていった、その根底には「人間であること」「尊厳」「愛情と優しさ」「自律」の深い哲学があることを、実例を上げながら丁寧に教えてくださいました。

それぞれの職業文化に縛られている思考を解放し、普通の市民の感覚で考えなくてはいけないことを強調しています。例えば以下の文、は印象的でした。

「多くの介護施設では、高齢者を楽しませる目的で音楽会などのイベントを行っています。本当にそれは楽しいのでしょうか？」

【※1 この記述は驚きでした】

1980年代の日本の老人介護施設は、8人から40人の相部屋が常識。朝部屋に入ると糞尿の臭いが充満しています。病院ではなく、大きな公衆便所に入っていくようでした。150人の高齢者を夜勤の看護師がひとりで担当していました。

「立つ」については、私は以前から強い思い入れがありました。

高齢者の脳内に脳脊髄液が過剰に溜まってくると歩行困難になりますが、脳脊髄液をチューブで体内の別の部位に流す手術をすると歩けるようになる正常圧水頭症という病気の診療を私はしていました。立つことは、筋力だけでなく、意識との関与など多くの謎があります。ですから、「立つ」の部分を読んで、つい興奮して下手な英語でしゃべりすぎました。

イヴさんの以下の記述は印象的です。

●ユマニチュードの「基本の柱」と呼んでいます。すなわち、「見る・話す・触れる」という包括的コミュニケーションと、自己の尊厳を感じるための「立つ」ことの4つの柱です。

●他の動物と違う人間の特徴についてさらに言えば、二本足で立つことはとても重要です。だからこそケアも立って行います。これは生理学的な機能維持においてのみ意味があるのではありません。哲学的に重要なのです。

私が講義前のセミナーで質問したかった内容は（拙い私の英語で伝わらなかったと思いますが）、「ユマニチュードは優れた技術ですが、介護士（carer あるいは caregiver）も、性格、相手との関わり方、など多くの違いがあるはずで、技術を教える時に直面する困難さを教えてください」でした。

今思うとこれは愚問だったと感じます。それぞれの介護士、看護師が、ユマニチュードの哲学をしっかりと学びつつ、実践の中で技術を習得していくしかないのですからね。

初心者の私が言うのもおこがましいのですが、言います。

ユマニチュードは、ハウツーもの（How-to book）として学んではいけません。

ぜひ、この本「ユマニチュードという革命」も皆さん読んで、そのハウツーの奥にある哲学にもしっかりと触れてください。